シモマッチの
校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男　盛岡中央高校附属中学校副校長

第15回
マウント野郎のメンタリティ

□「俺の方が上」

実は、私は以前から、「マウント野郎」という言葉を自分の中で秘かに使っていました。それは、会話をしていて、常に自分優勢の形に持っていかなければ気が済まない人のことです。この言葉を思いついて一人悦に入っていましたが、どうやらこれ、今結構流通しているらしいですね。「俺の方が先に使っていたのに」というのは、それこそ「マウント野郎」の発想で野暮の骨頂ですね。

私が思う「マウント野郎」の特徴とは、次のようなものです。

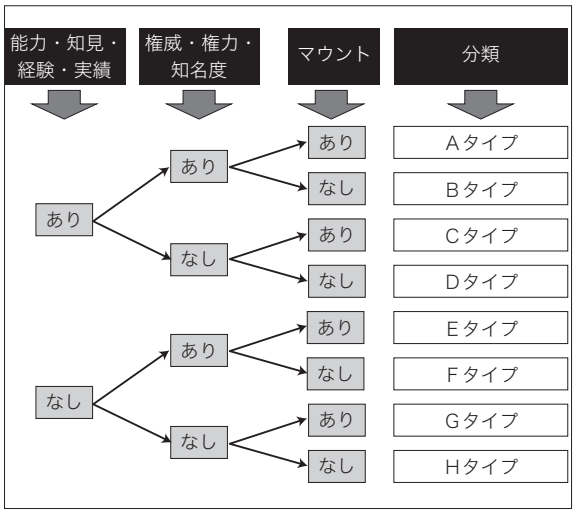
・会話の最後を必ず自分で締めくくる。
・自分の主張の正しさ、自分がいかにすごいかを（それとなく）伝えたいという意思が見え隠れする。
・「いや」「というか」という言葉で相手の会話を受ける（あるいはさえぎって話し出す）。

しばしば「攻撃的マウント野郎」ではなく、「一見受容型マウント野郎」にも出会います。相手の意見に耳を傾けるポーズを取っているけれど、もう自分の結論は最初から曲げることはなく、何を言っても、絶対にそこに持っていくような人ですね。

実際、マウントを取られ、「ははあ。なるほど」と思うこともあります。

それは相手のすぐれた知見や、体験のすごさに感心し、共鳴し、敬服するということです。そして、そのことで相手への尊敬の念も生まれます。なので、マウントをとるという行為は、必ずしも悪しきことではなく、「知見・見識・経験・実績」などの豊富さというものによって受け取り方が変わってきます。また、有名人や目上の人、という関係性も影響を与えるかもしれません。そういう人と同席すると、マウントを取られることが僥倖（ぎょうこう）であることもしばしばありますからね。

そこで、「能力・知見・経験・実績」「権威・権力・知名度」「マウント」という属性がポジティブかネガティブかに注目して分類（**図参照**）をしてみました（ヒマですね）。



例えば、能力があって、権威があるけれど、マウントを取らない、というBタイプは、恐らく「人間的に尊敬される人」なのでしょう。皆さんは、どのタイプに遭遇しますか。もしくは、自分はどのタイプだと思いますか。人のふり見て我がふり直せですからね（笑）。

どうつきあえばいい？

さて、この「能力」「権力」「マウント」は、その順で起きるのが普通ではないかと思います。つまり、「能力が高い。素晴らしい実績を残した」⇓「権威が与えられる」⇓「マウントを取る資格が与えられる」というように。

ところが、困るのはその時系列に逆走する「マウント野郎」なんですね。つまり、「マウントを取ることをしょっちゅうやる」⇓「きっとその人は偉いに違いないと人に思い込ませる」という構図をつくっちゃっているんですね。そして、ちゃっかりと偉いポジションに居座るという倒錯が起きるわけです。そうやって、偉いポジションになり上がっていくことほど、はた迷惑なことはありません。今はないと思いたいのですが、ひと昔前は教育現場にも多かったですね。職員会議で若い教師が意見を述べると、「お前は黙ってろ」とか。私もよく言われました。「シモマチは俺の目の黒いうちは管理職にさせねえ」という管理職もいました。そういう人は、実は権威への盲従が強く、判断基準は「何を言ったか」ではなく「誰が言ったか」なんですね。そして、基本的に「決めつけ」「レッテル貼り」「理解不足からくる誤解」が顕著なので、論を尽くそうとしても、不毛な会話に陥り、結局そこにできる人間関係は、隷属か対立になってしまうんです。

でも、今は、確実にそういう世界が変革され、年齢、職域、性別を超えてアイデアを語り合い、互いに尊重し成長を共にするような職場をつくろうとする管理職が増えてきていると私は思っています。きっと「月刊高校教育」の読者の皆さまもそんな方々でしょう。そして幸いなことに、私は今、年齢や職種を超えて、互いに高めあう関係を持つ仲間に恵まれています。そういう人たちとのコミュニケーションによって私は自分の直すべきところに気づき、自分を変えていこうという思いも抱くようになりました。

だから、時にマウント野郎に出会っても、自分を見つめ直す機会を与えてくれる人とありがたく受け入れよう。そして、理不尽にマウントを取られ上から目線でパウンドされても、したたかに、下から三角締めを狙っていけばいいんです。ってなんやねん。